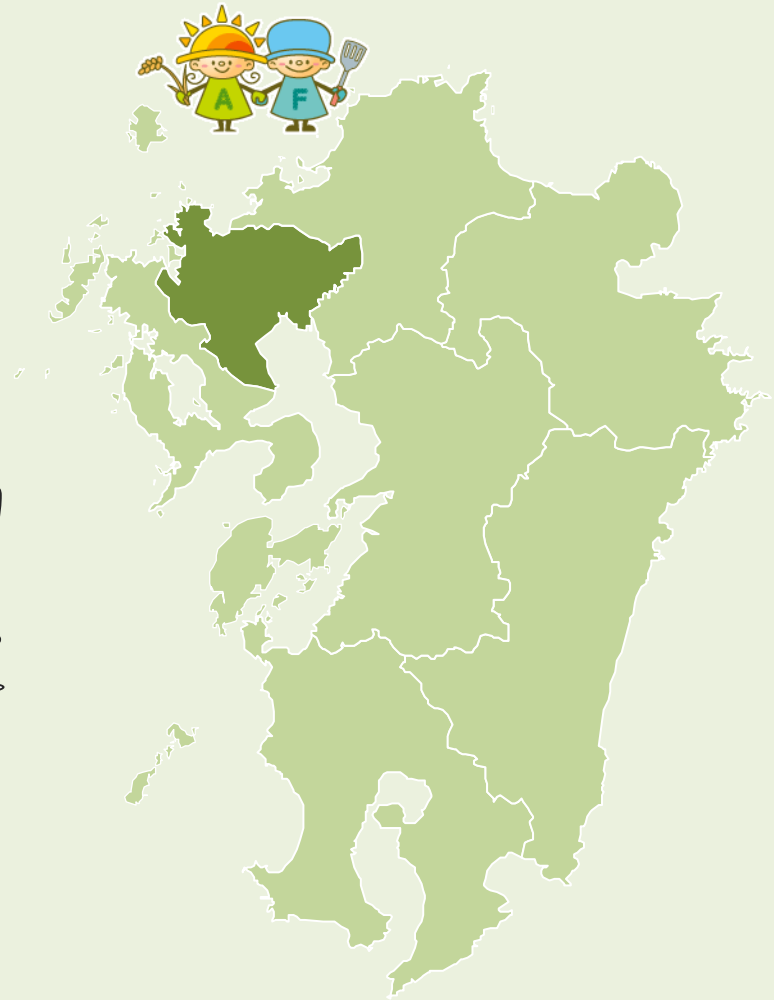
「佐賀県の農業の概要について」



1．佐賀県の概要

2．全国に誇る佐賀の農産物

3．データでみる佐賀の農業

2025年４月

【佐賀県の紹介】

佐賀県は九州の北西部に位置し、東は福岡県、西は長崎県に接し、東西を山々に囲まれながら、北に玄界灘、南に有明海という趣きの異なる二つの海に接している。

朝鮮半島までは約200ｋｍ足らずと近接しており、大陸文化の窓口として歴史的、文化的に重要な役割を果たしてきた。

県西部には世界的にも有名な、有田焼、伊万里焼、唐津焼といった、古くからの陶磁器産地がある。

県南部から県東部にかけて広がる佐賀平野では米や麦といった土地利用型の農業が、また北部では果樹や畜産、沿岸漁業が盛んである。

有明海は全国有数の海苔の養殖地であり、豊富な食材に恵まれた県である。

面積：約 2,440km^2（全国42位）
人口：約 81.1万人（全国41位）

佐賀牛
大阪中央卸売市場
への和牛出荷頭数
全国1位
（R5年度）

新品種
「にじゅうまる」
R3年デビュー

ハウスミカン
出荷量全国1位
（R5年産）

米の食味ランキング
「さがびより」15年連続
特A評価
（R6年産）

新品種
「いちごさん」
H30年デビュー

ハウス幸水なし
出荷量全国1位
（R5年産）

たまねぎ
出荷量都府県1位
（R5年産）

二条大麦
収穫量全国2位
（R6年産）

アスパラガス
出荷量都府県2位
（R5年産）

れんこん
出荷量全国2位
（R5年産）

整備された水田
（平坦地域）

共同乾燥調製貯蔵施設

整備された生産基盤を活用
耕地利用率133.3%
38年連続全国1位！
（R5年）

たまねぎ

白石地区を中心に県全域で生産され、R5年産では、出荷量は都府県第1位。極早生品種の3月初旬の出荷に始まり、品種をリレーしながら10月下旬まで長期間出荷。

良質のたまねぎ産地として評判

さが春一番たまねぎ

水田裏作として、県内各地で栽培

アスパラガス

R5年産の出荷量は都府県第2位、10a当たり収穫量は熊本県に次いで全国2位。グリーンアスパラガスが主だが、栽培方法が異なるホワイトアスパラガスも生産。

早くから共同選別を実施

半促成長期どりの開発・普及

半促成長期どりにより、単収は全国2位

いちごさん

7年の開発期間を経て、2018年秋にデビューした。
品質・収量に優れ、県内作付面積の97%で栽培されている。

眺めてうっとり、かじって甘い。

「凛とうつくしい色と形」
「華やかでやさしい甘さ」
「果汁のみずみずしさ」
が特徴です。

いちごさんどうで都内でPR

にじゅうまる

胸を張って、うまい。
そんなキャッチフレーズを背負って、2021年2月にデビュー。
食べ応えのある大きさや爽やかな香りで貯蔵性にも優れる。

開発期間はなんと20年以上！

まんまる黄金色

販売初日の様子

「プチっとした食感」
「一気に溢れるジューシーな果汁」
「豊かな甘みと、ほどよい酸味」
まさに「中晩柑のフルコース」ここに誕生です。

ハウスみかん

唐津市を中心に栽培され、R5年産では、全国の出荷量の36%を占めている。昭和61年以降、出荷量は日本一。

日本一のハウスみかん産地

いち早くハウスみかん栽培を開始

栽培面積、生産量ともに全国一の規模

佐賀牛

柔らかい赤身の中にきめ細やかに風味ただよう脂肪が入った国内最高クラスの品質。
香港・シンガポール等へ輸出し、好評を得ている。

肉質・増体など産肉能力に優れた
県産種雄牛「美津秀吉」の作出

品質は全国トップクラス

肉質向上のため、
飼料給与ガイドラインの実証・普及

海外でも高い評価
（海外からの食肉バイヤーの視察）

さがびより

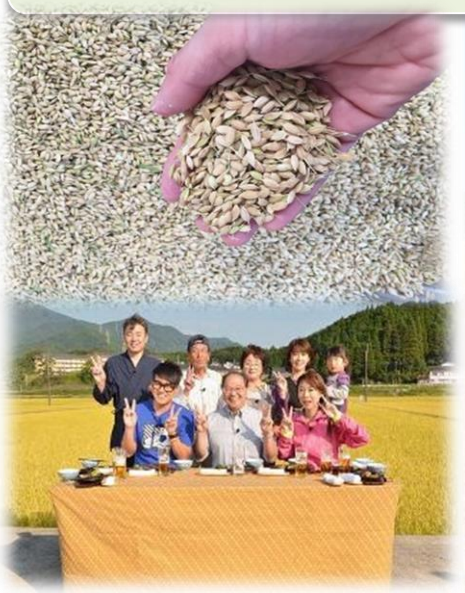
県農業試験研究センターが11年がかりで研究・開発を行い、H21年にデビュー。「米の食味ランキング」で15年連続最高ランクの‘特A’の評価を獲得(R6年産)。

ひなたまる

県農業試験研究センターが12年がかりで研究・開発を行い、R7年にデビュー予定。
多収で高温耐性を持ち、病気や虫にも強い特性がある。

ひなたまる
HINATAMARU

全国に誇る逸品米



米専門店から高い評価
メディアでも紹介

ＪＡさが認定
「さがびより米（マイ）スター」

新品種の登場

高温条件化でも
品質が良い

麦

R6年産の麦全体の作付面積は全国3位で、うちビールや焼酎の原料となる二条大麦は全国1位、うどんやパンの原料となる小麦は全国3位。

大豆

高タンパクで豆腐用に適した「フクユタカ」が主に作付され、品質の良さから高い評価を得ている。

実需に求められる品質を

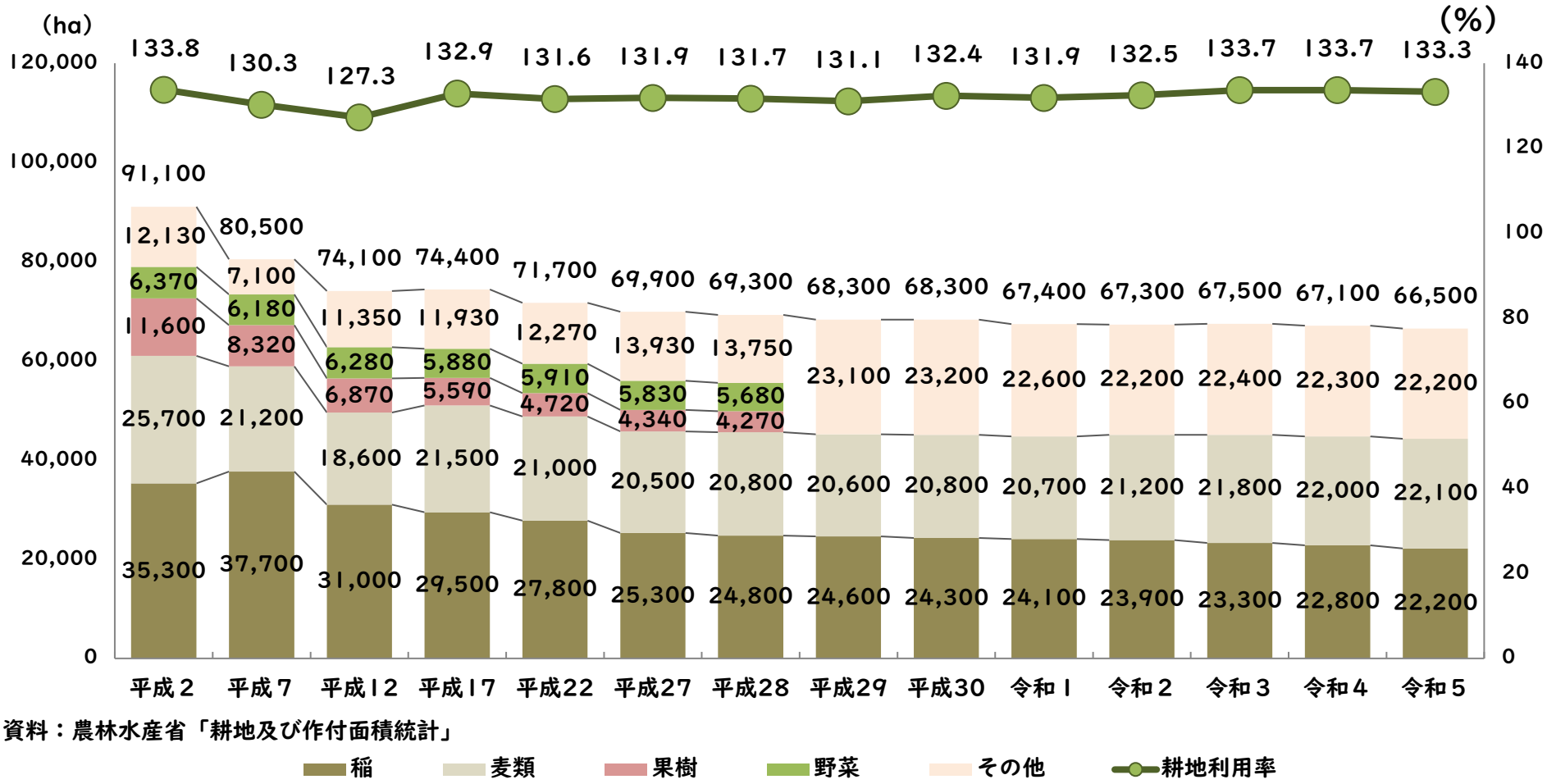
「はる風ふわり」
栽培マニュアル

「はる風ふわり」
製パン

安定生産に向けて

降雨後すぐに播種でき、省力化も図られる「大豆不耕起播種技術」

作付延べ面積及び耕地利用率



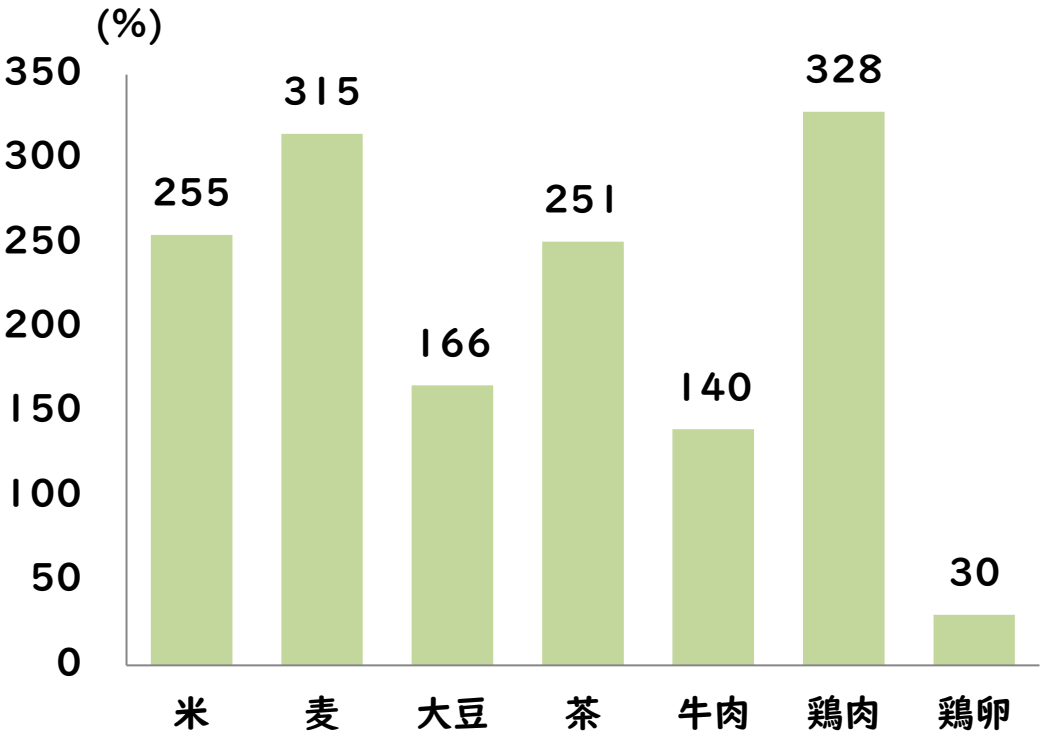
資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」

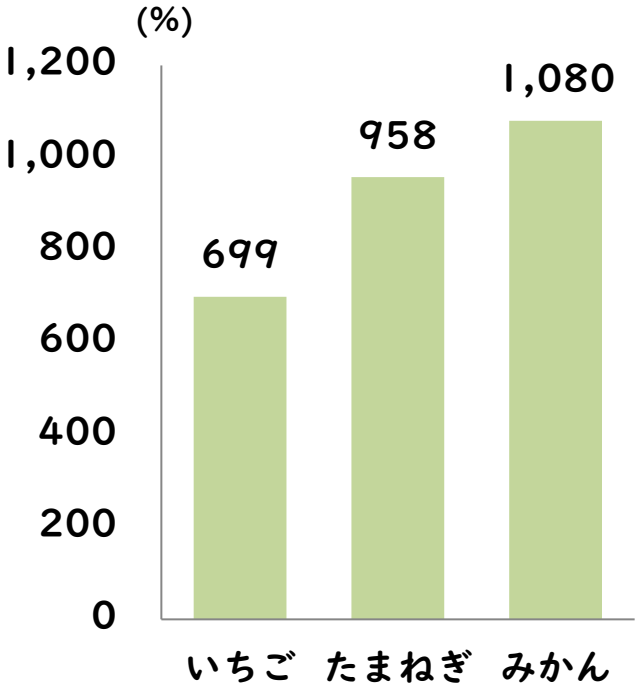
R5年の作付延べ面積は66,500ha（耕地利用率は133.3%で38年連続全国1位）

R6年の耕地面積は、前年より300ha減少し、49,600ha（田の割合：83.5%）

※H29以降は「果樹」「野菜」の数値が公表されておらず、「その他」に含まれる。

県産農作物の食料供給力（令和４年）



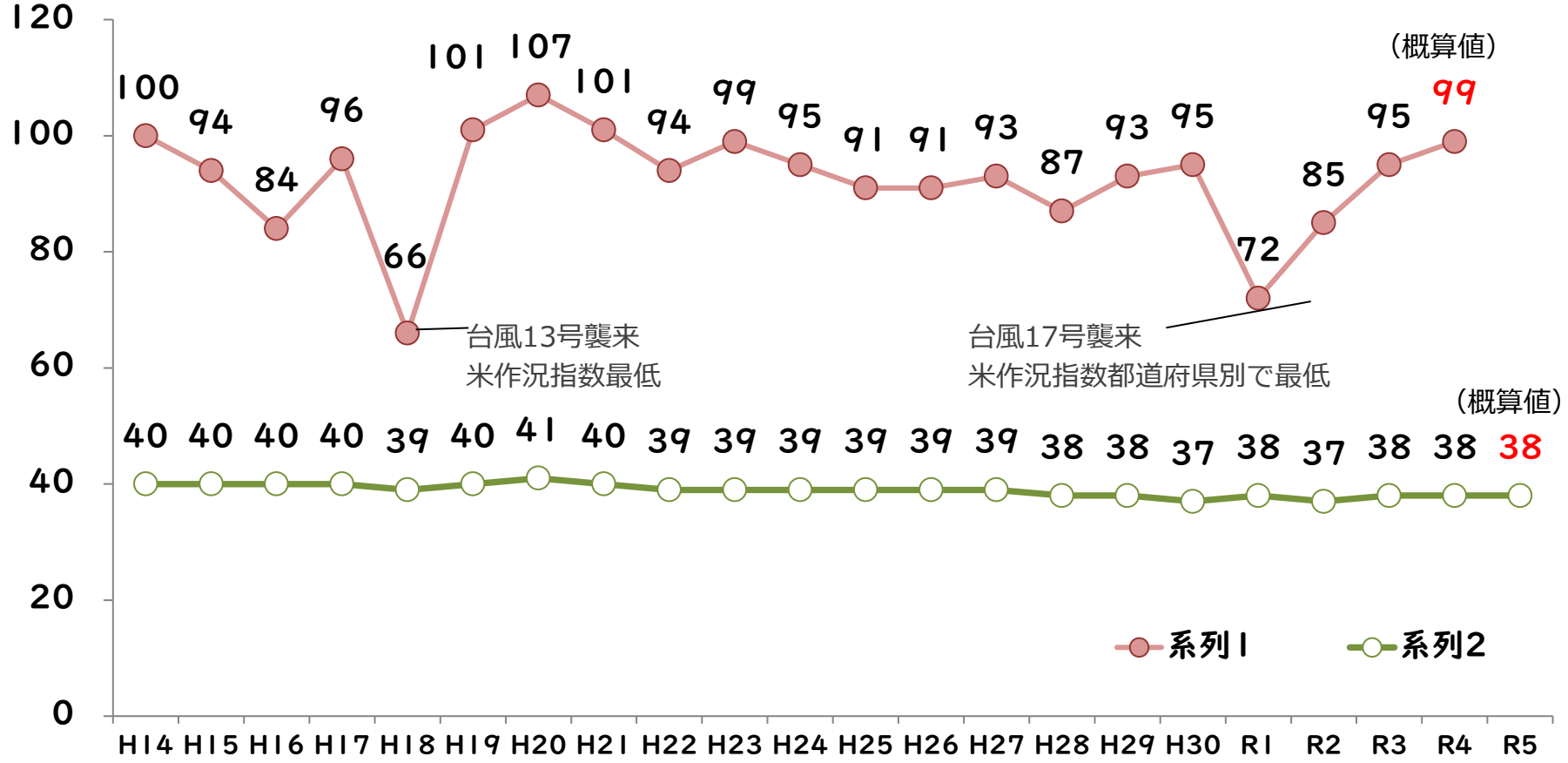


資料：佐賀県農政企画課

食料供給力・・・本県農産物の他県への供給力を、県内需要量を基準として重量ベースで試算した数値

$$\text{品目別供給力} = \frac{\text{品目別県内生産量}}{\text{品目別県内需要量}} \times 100$$

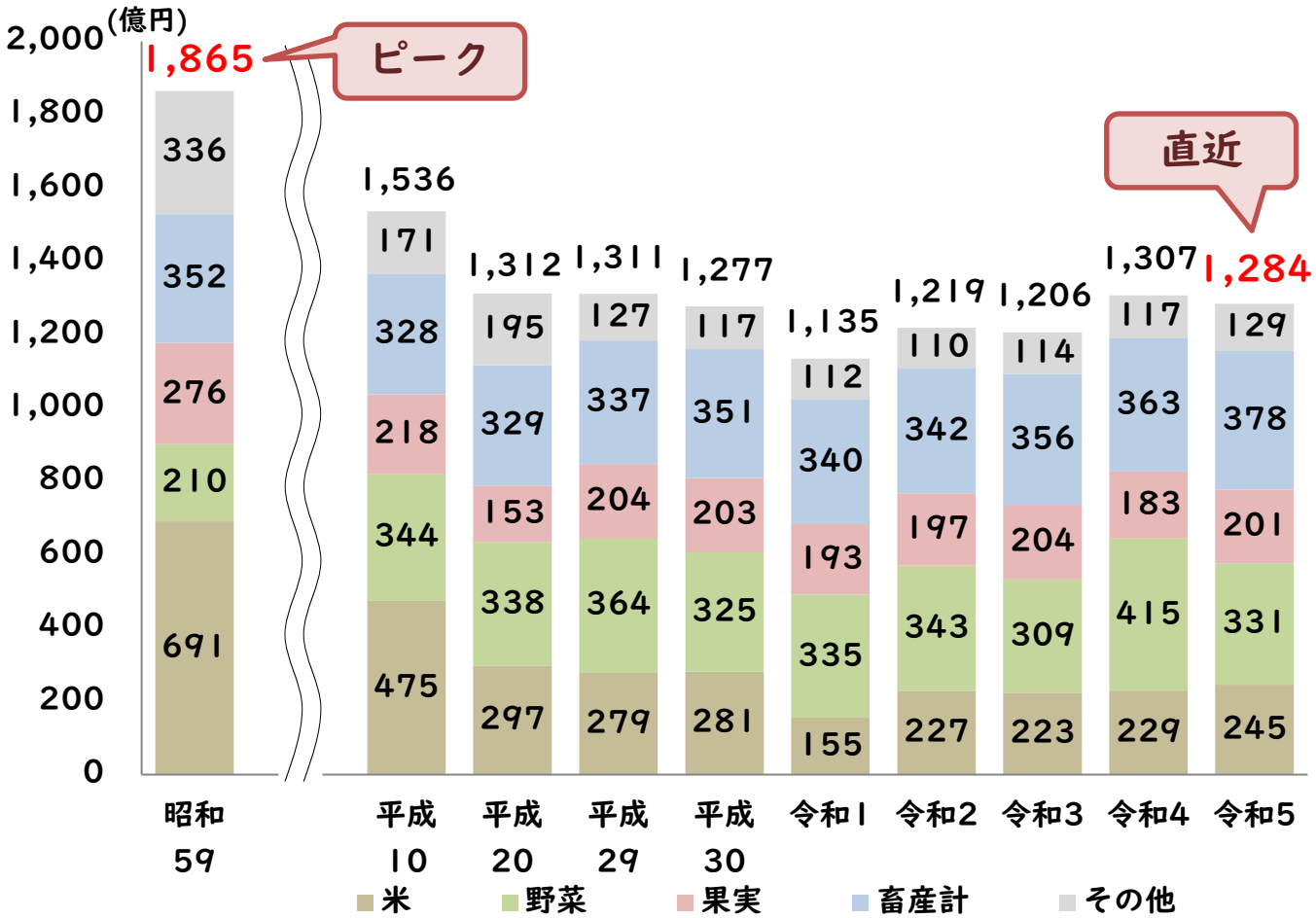
食料自給率（ｶﾛﾘｰﾍﾞｰｽ）の推移



資料：農林水産省「食料自給率の部屋」

全国が「40」前後で推移する中、本県は、台風などの異常気象年を除けば、おおよそ「90」前後で推移。令和元年は大雨や台風17号による塩害等により、令和２年は夏季の低温や台風、トビイロウンカ被害等による水稲の不作により落ち込んだが、令和４年は99％まで回復している。

農業産出額の推移



産出額上位5品目（令和５年）

順位	品目名	産出額（億円）	構成比（%）
1	米	245	19.1
2	肉用牛	185	14.4
3	みかん	139	10.8
4	ﾌﾞﾛｲﾗｰ	101	7.9
5	いちご	91	7.1

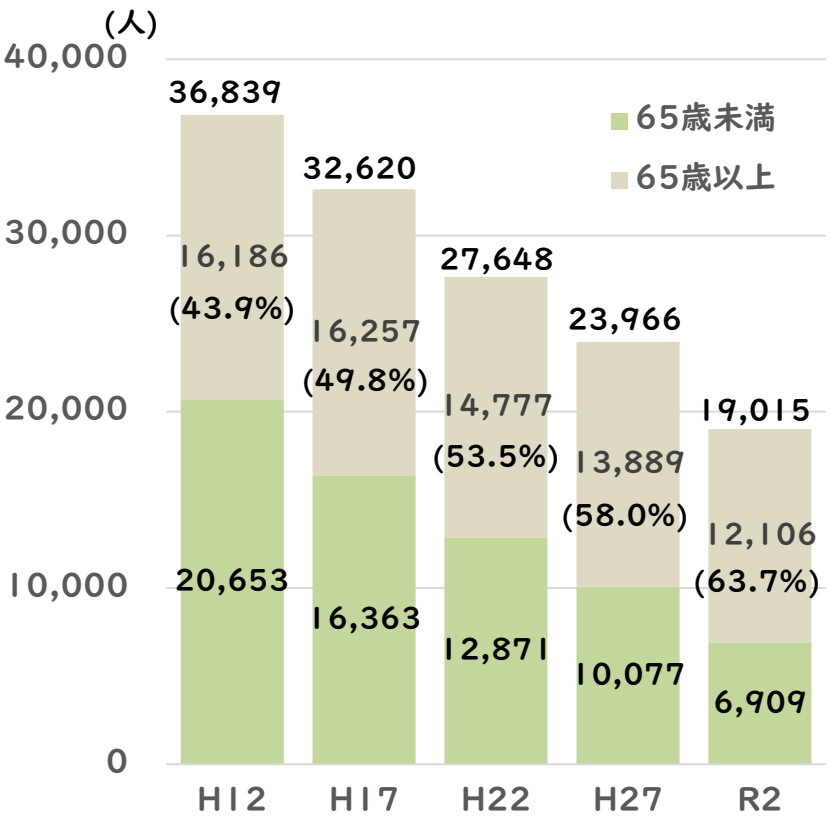
資料：農林水産省「生産農業所得統計」

Ｒ５年度においては、令和４年に全国的な供給量不足により高騰していた「たまねぎ」の単価が平年並みに戻ったため、前年から64億円減少。しかし、主要園芸品目は生産量の増加や単価向上などにより増となっている。

※平成19年から農業産出額の推計方法が改められたため、それまでのデータとは連続しない。

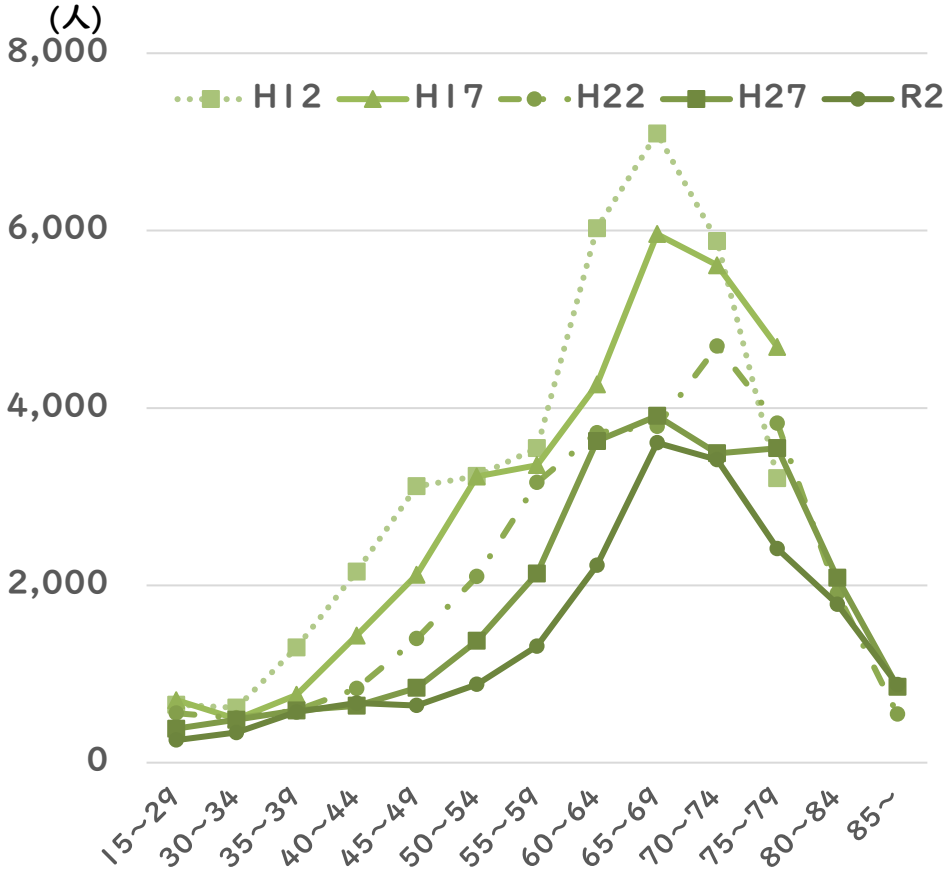
基幹的農業従事者数及び年齢構成の推移

基幹的農業従事者数の推移



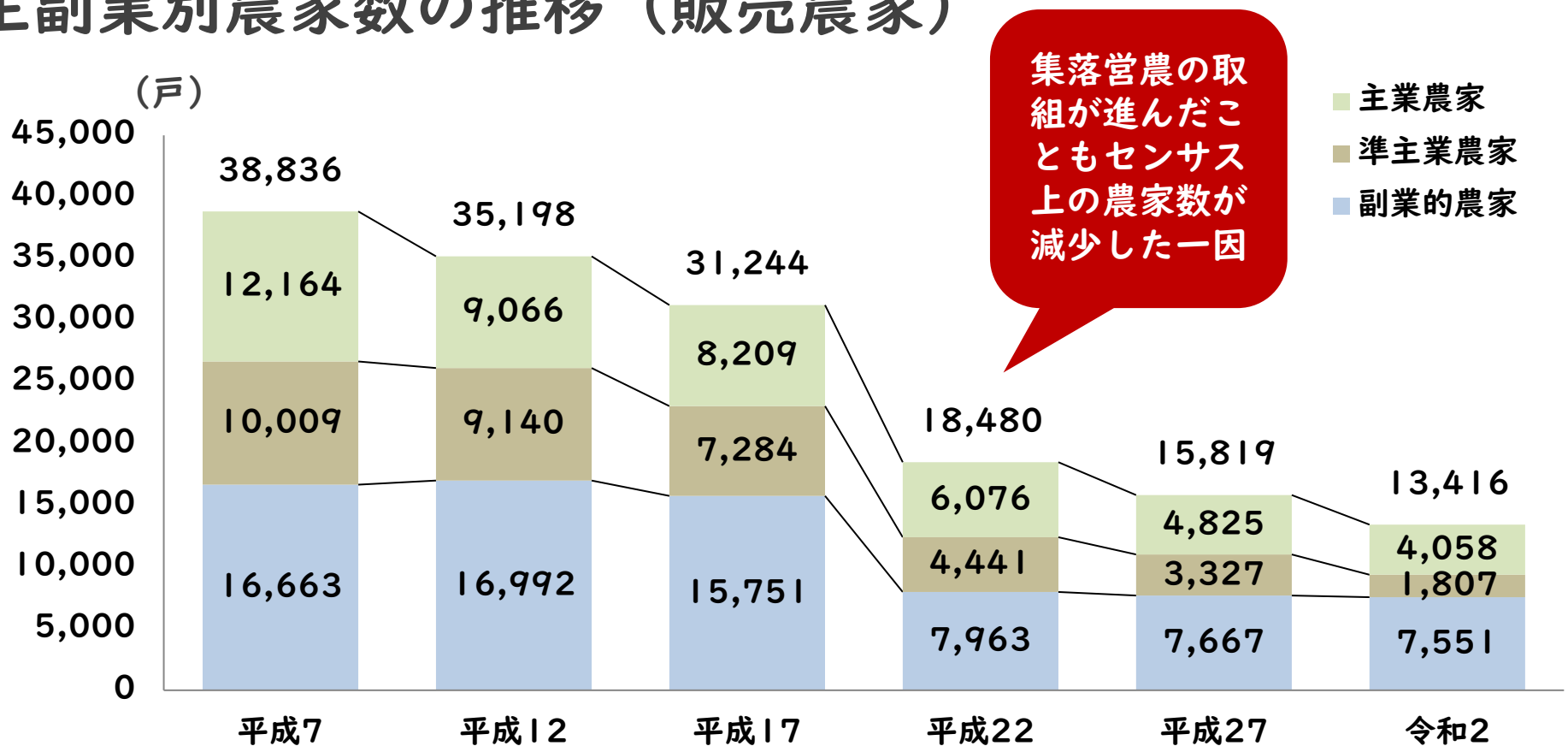
資料：農林水産省「農林業センサス」

基幹的農業従事者の年齢構成の推移



※基幹的農業従事者：
農業就業人口（15歳以上の農家世帯員のうち「農業のみに従事した世帯員」及び「農業と兼業の双方に従事したが、農業の従事日数の方が多い世帯員」）のうち、普段の主な状態が農業に従事していた者

主副業別農家数の推移（販売農家）



資料：農林水産省「農林業センサス」

R2年の販売農家数は13,416戸で、H27年から15.2%の減少

R2年の主業農家と準主業農家は、H27年からそれぞれ15.9%と45.7%減少

副業的農家は、ほぼ横ばい

佐賀県全体の中での農業の位置づけ

土地面積に占める耕地面積の割合（令和６年）
　耕地面積：49,900ｈａ
　⇒県の総面積の20.4％を占め、全国の**約2倍**

県内総生産（名目）に占める農業生産の割合（令和３年）
　農業生産：564億円
　⇒県内総生産の1.8％を占め、全国の**約2倍**

県の総世帯に占める総農家数の割合（令和2年）
　総農家戸数：18,645戸
　⇒県の総世帯数の5.9％を占め、全国の**約2倍**

※県内総生産
県内にある事業所の生産活動によって生み出された生産物の総額から、中間投入額(物的経費)を差し引いたもの。農業関係の類似の統計として農業産出額があるが、農業産出額は農家庭先販売価格(各種奨励補助等を加えたもの)に数量を乗じたものの総和であり、物的経費を含む点で異なる。